

防災・復興教育についての研究(2)

—岩手県教育委員会の中学校・高等学校副読本の 内容の分析を中心に—

藤岡秀樹^{*1}

A Study of Education for Prevention of Disasters and Reconstruction(2):
Focusing on the Contents Analysis of the Subtext for Junior and Senior
High School, Published by Iwate Prefectural Editorial Board

Hideki FUJIOKA

抄 録: 岩手県教育委員会が防災・復興教育のための副読本として刊行した『いきる かかわる そなえる』の中学校・高等学校用の内容を紹介し、特徴について論じた。中学校用は 45 項目が取り上げられ、岩手県内の学校の取組や復興の歩みなどが紹介されていた。高等学校用は 37 項目が取り上げられ、県立高校 30 校と、特別支援学校 4 校の実践が紹介されていた。東日本大震災から 9 年近く経過したので、狭義の防災・復興教育だけでなく、キャリア教育や郷土学習・地域学など多岐にわたる内容が取り扱われていた。最後に、岩手県教育委員会が進める「いわての復興教育」プログラムの成果について紹介した。

キーワード: 防災教育, 復興教育, 副読本, 中学校, 高等学校, 岩手県教育委員会

I. はじめに

2011 年 3 月 11 日に東日本大震災が起こってから 9 年程経過した。被災した東北地方や関東北部でも、復興は見られるものの、地域差は激しい。他方、被災 3 県を中心に、防災・復興教育の取組も進められている。

藤岡 (2019) は、岩手県教育委員会が防災・復興教育のための副読本として刊行した『いきる かかわる そなえる』の小学校低学年用(1～3 年生対象)と高学年用(4～6 年生対象)の内容及び、岩手県教育委員会が進めてきた復興教育プログラムを紹介した。

本論文では、前報に続き、副読本『いきる かかわる そなえる』の中学校用と高等学校用の内容を紹介し、その特徴を明らかにする。

II. 岩手県教育委員会作成の中学校用副読本

岩手県教育委員会は、防災・復興教育のための副読本として、2014 年 5 月に、『いきる かかわる そなえる』と題する副読本を刊行した。副読本は、小学校低学年用・高学年用・中学校用、

^{*1} 京都教育大学教育学部教育学科

さらに2020年に刊行された高等学校用を併せて4種類から成る。2020年には、中学校用の改訂版が刊行されたので、これを紹介しよう。

2.1. 中学校副読本の内容

中学校副読本は65ページから成り、写真を多用しカラフルである。最初のページで、ボーカルグループのグックルが作詞作曲した「歩 (aruku)」という曲の歌詞が紹介されている。2011年の東日本大震災の半年後に制作された曲である。

「いきる」は11項目、「かかわる」は22項目、「そなえる」は12項目から構成されている。「いきる」の項目は、以下のようにになっている。補足しながら簡潔に紹介しよう。

- ・ 普代水門と太田名部防潮堤－東日本大震災時に間一髪で消防士により閉鎖された普代水門と太田名部防潮堤の紹介。設置当時はお金の無駄と言われたが、過去の津波の教訓を活かした防災施設について触れている。
- ・ 自然保護で環境省表彰－葛巻町小屋瀬中学校の取組。
- ・ (中学生の作文)「水と共に生きる」－「全日本中学生 水の作文コンクール」で受賞した陸前高田市の中学生の作文。
- ・ 水沢の三先人「高野長英・後藤新平・斎藤實」 奥州市水沢地区が輩出した偉人の紹介。
- ・ 銭形平次の生みの親 野村胡堂－紫波町出身の作家野村胡堂の紹介。
- ・ 4度目の挑戦でオリンピックの切符を手にした水本選手－くじけずに、チャレンジすることの必要性を訴えている。
- ・ 職場体験は地域の子育て－大槌町の大槌学園の学校設定科目「ふるさと科」での職場体験の紹介。キャリア教育の視点での解説。
- ・ 二十歳の自分へ－大沢小学校のタイムカプセル 東日本大震災時は大沢小学校の6年生であった人たちが、大人になった時、当時カプセル入れた手紙を読み、当時を振り返ったという内容。また、山田町の大沢小学校が取り組んできた「海よ光れ」という全校表現劇についても紹介。大沢小学校は統合のため、現在は存在しない。
- ・ 演劇で郷土の偉人を語り継ぐ－西和賀町沢内地区の三偉人といわれる深沢晟雄村長、飢饉のために命を捧げたオヨネ、寒冷地での米作りに取り組んだ藤原長作を沢内中学校の生徒が、東日本大震災以後に演劇として取り組んだことの紹介。
- ・ 「心の授業」－ストレスの理解とストレスマネジメントの解説。
- ・ 避難所におけるラジオ体操やストレッチの効果。

「かかわる」の項目は、以下のようにになっている。

- ・ 家族を信じて 自分の命は自分で守る－震災を体験した釜石市民による未来のあなたへの10のメッセージ。英訳も付記。
- ・ ドイツ友好都市との交流－雫石町とドイツのバート・ヴィンプフェン市との交流の紹介。
- ・ 興田中学校応援団 「シイタケ王国」の復活を願う－福島第1原発の爆発事故で放出された放射能に汚染され、原木シイタケの出荷が制限された－関市大東町の興田中学校の生徒が、シイ

タケ農家を励まそうとした取組（絵手紙やカレンダー、看板の作成）。

- ・「かるまい学」でふるさとを知る・学ぶ・活かすー軽米町軽米中学校の郷土学習の紹介。
- ・SHEL 学習で環境とエコを学ぶー盛岡市下橋中学校の「SHEL」学習の紹介。「SHEL」とは、S（下橋中で）、H（人と）、E（環境を）、L（学ぼう）の頭文字を続けたもの。
- ・チャグチャグ馬コ クリーン作戦ー滝沢市滝沢南中学校が取り組む道路や地域の清掃活動の紹介。
- ・修学旅行で先輩と交流ー戸町奥中山中学校のキャリアアップ教育ー修学旅行先の関東で「先輩と語る会」を開催して、キャリア教育に取り組む。
- ・真崎わかめ復活物語ー田老第一中学校の生徒会企画劇ー東日本大震災で宮古市真崎地区のわかめ養殖が大打撃を受けたが、再建するための漁民の取組を劇化し、文化祭で地域の人々に上演。制作に際しては様々な文献学習を行った。
- ・地元特産の漆を生かした浄法寺塗ー県内の伝統産業の1つである浄法寺塗の紹介。
- ・英語教育の町 金ヶ崎ー1987年度から実施している中学生のアメリカ研修の紹介。
- ・岩手の海で育ち、世界で活躍する南部潜りー洋野町種市の南部潜りの歴史と種市高校海洋開発科の潜水実習を取り上げている。
- ・「北上を世界のニットの聖地」にしたいー北上市の地場産業のカシミアニット作りの紹介。
- ・若者が帰ってきたくなる町にー地域づくりに高校生の声ー久慈高校、久慈東高校、久慈工業高校の生徒と市の職員、地元企業との地域づくりのワークショップの紹介。
- ・過去から継がれたこの路を 未来に繋ぐこの路をー野田村の太陽たちー野田村野田中学校の生徒は、大震災後に「野田村の太陽になろう」を合い言葉に、創作太鼓演奏に取り組んだ。
- ・地域を学ぶ・地域から学ぶ「大迫学」ー花巻市大迫中学校の伝統文化学習の「大迫学」の紹介（早池峰神楽など）。
- ・平泉中学校における「郷土・平泉学」ー平泉町平泉中学校の生徒は、学校独自のテキスト「郷土・平泉学」を学び、「平泉検定」を受験し、さらに3年の修学旅行では東京都で平泉のPRをしたり、平泉に来た観光客にガイドをしたりする取組を紹介している。
- ・JRC 委員会のボランティア活動ー九戸村九戸中学校のJRC（Junior Red Cross）委員会のボランティア活動の紹介。
- ・中学校の地域ボランティアー2019年の台風第19号の被害に対する山田町の山田中学校と豊間根中学校のボランティア活動の紹介。
- ・あなたの中に生きているー田野畑中学校の文化祭劇ー南部三閉伊一揆や自然災害を取り上げた劇の上演の紹介。
- ・小さな町の大きな貢献 住田町の後方支援ー住田町が東日本大震災で隣接する陸前高田市と大船渡市を支援した取組の紹介。
- ・自分たちの復興ーかまいしキッチンカープロジェクトー津波の被害が大きかった釜石市飲食店経営者が、キッチンカーで営業を再開し、被災地住民に食を提供した。
- ・大槌高校復興研究会の果たす役割ー避難所となった大槌高校に、生徒の7割が参加する自主的の研究会である復興教育研究会が2013年に発足した。地域を支える活動の柱は、①定点観測（復興の時系列的変化を把握する）、②他校交流、③防災・町づくり、④キッズ・ステーション（生

徒が子どもたちと遊ぶ) の 4 つである。

「そなえる」の項目は、以下のようになっている。

- ・未来をつくる－東日本大震災津波伝承館 いわて TSUNAMI メモリアルー陸前高田市の高田の松原に作られた東日本大震災津波伝承館の展示紹介。「てんでんこ」からはじめることが強調されている。
- ・地震・津波・火山噴火のしくみと被害－地震の 4 つのタイプの解説、津波のしくみと被害及び火山噴火のしくみと被害についての解説。
- ・自然災害の歴史－国内外の自然災害の歴史の解説。
- ・分断された岩泉町－平成 28 年台風第 10 号－台風第 10 号による岩泉町の被害状況の紹介
- ・すべてが止まったら、どうする？－ライフライン－水・ガス・電気などのライフラインが止まった時にどうするか解説。
- ・災害時の情報と心理－「拡散希望」が記載された情報には、デマや不確実な情報があり、安易に拡散しないことを述べ、次に「多数派同調バイアス」と「正常性バイアス」を解説し、災害時にはこれらのバイアスを乗り越えることの必要性を論じている。
- ・あなたに助かってほしいから－大船渡津波伝承館館長の斉藤氏が震災当日に流した津波の動画の果たした役割を紹介。
- ・より良い避難所運営のために－八幡平市西根第一中学校が、DIG 実習や HUG 実習を経て、2019 年に全校で避難所運営実習（岩手山の噴火による地震を想定）を行った取組の紹介。DIG とは、Disaster（災害）、Imagination（想像力）、Game（ゲーム）の頭文字で、地図を使って防災対策を検討する訓練のこと。HUG とは、Hinanzyo（避難所）、Unei（運営）、Game（ゲーム）の頭文字で、避難所に見立てた紙の上に避難者の年齢・家族構成・持病などの情報を書いたカードを配置し、ゲーム的に避難所運営を学ぶことである。
- ・地元は自分たち中学生が守る！－岩手町川口中学校が取り組んだ防災教育の紹介。
- ・家族と一緒に災害に備える－遠野市遠野中学校の生徒が家族と一緒に、地域の危険な箇所を確認した取組の紹介。
- ・レスキューフーズ【カレーライス】で非常食体験－釜石祥雲支援学校小学部・中学部が、火も水も使わないレスキューフーズのカレーライスを試食した授業の紹介。
- ・災害ボランティア講習会で学ぶ－九戸村九戸中学校の JRC 委員会が実施している「災害ボランティア講習会」（炊き出し訓練、防災についての講話、救命講習）の紹介。

2.2. 中学校副読本の特徴

中学校の副読本の内容は、多岐にわたっている。教科書ではないので、全部を取り扱う必要性はないが、地域（沿岸部・内陸部）や生徒の実態に応じて指導を展開することになる。

生徒の発達段階に対応したトピック（項目）が多く、小学校用の副読本よりも内容が深化していることが見いだせる。小学校用と比べて、東日本大震災後の県内の中学校における防災教育や郷土学習を中心とした取組の紹介の数が多い。「いきる」では、5 校（うち 1 つは生徒の作文）が、「かかわる」では、17 校（うち 4 校は高等学校）が、「そなえる」では、5 校（うち 1 校は特別支

援学校)が紹介されている。高等学校の取組が紹介されているのは、キャリア教育・進路学習としての意味合いをもっていると言えよう。

初版と比べて、内容が大きく差し替えられているのも特徴の1つである。「いきる」のトピックは、初版では11項目(うち1つは作文)であるのに対して、改訂版では11項目(うち1つは作文)で、トピック数は変化がないものの、内容は差し替えられている。「かかわる」のトピックは、初版では13項目(うち3つは作文)であるのに対して、改訂版では22項目(作文は無し)と増加し、内容も大きく差し替えられており、県内の中学校の実践紹介が増加している。「そなえる」のトピックは、初版では9項目であるのに対して、改訂版では12項目と増加している。自然災害の記述では、初版の内容の一部を踏襲している。

各トピック(項目)の末尾に1~3つの発問が記載されているのは、小学校用と同様である。「いきる」では、心身の健康として、ストレスの理解とストレスマネジメントについて解説されている。小学校用でも取り上げられていた内容で、それを深化させている。

県内の各地域(奥州市、紫波町、西和賀町)の先人・偉人が取り上げられているのも特徴である。岩手県の面積は北海道に次いで広く、内陸部と沿岸部の交流はそれほど多くなく、県内の先人・偉人についても、必ずしも理解できているとは言えない。この副読本での学習を通して、理解が深まることを期待したい。

劇づくりも複数取り上げられている。文化祭などの特別活動として展開できるが、脚本作成では歴史学習や地域学習と結びつくので、総合的な学習の時間として取り扱うことが可能である。副読本を活用して、地域の素材をもとに劇づくりをすることを勧めたい。

「かかわる」では、海外との交流も取り上げられており、国際理解教育の視点も併せて指導することが可能である。

各学校の実践の紹介では、津波の被害がなかった内陸部の学校も多く取り上げられ、「地域学」の学びが紹介されている。初版では、沿岸部の取組がかなりの部分を占めていたが、改訂版では相対的な比重は減少している。被災の程度が大きかった沿岸部と津波の被害はなく相対的に復興が早かった内陸部との学校間交流も、約9年を経過したので、減少傾向にある。

「いきる」と同様に「かかわる」でも、劇づくりが紹介されており、この2つの領域の共通点が見いだせる。また、「地域学」を学ぶ(郷土学習)を通して、地域の伝統文化に関心をもたせ、太鼓の演奏や神楽の上演につなげている。

高校生の取組の紹介は、地元の高校の取組を知ることができ、キャリア教育・進路学習へつなげることができよう。

ボランティア活動についても、2校が紹介されている。東日本大震災直後の被災地でのボランティア活動ではなく、1校は2016年の台風の被害に対するもので、地震や津波に対する支援活動と共通性が見られる。もう1つの学校は、JRC委員会のボランティア活動で、災害に備えた取組(講習会の開催)であり、「そなえる」でも取り扱われている。

「そなえる」では、震災や津波の経験を踏まえた自然災害の理解や防災と安全を中心に構成されている。地震、津波、火山噴火の仕組みと被害についてやや詳しく述べている。また、世界の自然災害を34件(うち日本の災害は7件)取り上げて簡単な解説をしている。その種類は、地震、津波、火山噴火、台風、洪水、森林火災である。

災害時の心理と情報を取り上げているのは、興味深い。災害時には、メールやSNS、インターネットで情報が発信されることが多いが、その中にはデマや不確実な情報があることに警鐘を鳴らしている。インターネットの有効性ととも、欠点もあることを指摘しており、デマを防ぐためには、①鵜呑みしない、②拡散しない、③すぐに行動につなげない、④政府や自治体のサイトなどで正確な一次情報を確認することを提言している。

そして、「地震の後には津波」「津波でんでんこ」といった知識があっても、「多数派同調バイアス（判断を迷ったときに周りの人と同じ行動をとることが安全だと考える心の働き）」「正常性バイアス（経験したことのないことが起きたとき、「こんなことは起こるはずはない」「何かの間違いだ」と感じ「異常事態は発生していない。まだ正常」と思ってしまう心の働き）」が生じやすく、災害時には乗り越える必要があることを力説している。

「いきる」「かかわる」「そなえる」は相互に関連性があり、関連づけて指導することが求められよう。岩手県の場合、沿岸部と内陸部で東日本大震災の被害に差異が見られ、生徒だけでなく、教師にも温度差がある。そして、大震災から10年近く経過し、記憶の風化も見られる。教材研究に関しても、この点を念頭に置くことが必要である。

Ⅲ. 岩手県教育委員会作成の高等学校用副読本

3.1 高等学校用副読本の内容

高等学校用の副読本は69ページから成り、中学校用と同様に写真を多用しカラフルである。「いきる」は12項目、「かかわる」は15項目、「そなえる」は10項目から構成されている。

「いきる」の項目は、以下のようになっている。

- ・ 未来への船出—釜石鵜住居復興スタジアムのキックオフ宣言をした釜石高校の生徒（震災時は鵜住居小学校3年生）の宣言内容の紹介。
- ・ 海風と太陽に見守られてブランド米「たかのゆめ」—陸前高田市の被災地の農業復興の象徴であるブランド米の紹介。
- ・ 歌声で結ばれた友情—不来方高校・釜石高校音楽部—内陸部の不来方高校音楽部と活動の場を失った釜石高校音楽部の交流。
- ・ 高校生による小規模校サミット—小規模校である大野高校・住田高校・宮古北高校・西和賀高校が集まり、魅力ある高校にするための話合いの紹介。
- ・ 東日本大震災を乗り越えて夢を実現—阿部友里香選手—山田町生まれの障がい者カントリースキーの選手である阿部選手（盛岡南高校在籍）の逆境を乗り越えて頑張った活動の紹介。
- ・ ASMSA 派遣事業から学ぶこと—花巻北高校—アメリカのホットスプリング市にあるアーカンソー数理芸術学校（ASMSA）と花巻北高校は姉妹校になり、生徒の派遣事業を行っている。研修の目的と成果を紹介し、グローバルリテラシーを高め、国際社会で活躍することが期待されている。
- ・ 海洋開発のプロフェッショナル育成—種市高校—中学校用副読本でも紹介されているが、同校の海洋開発科は全国唯一の潜水と土木の知識を学ぶことができる学科である。「南部潜り」を

養成する実習内容の紹介。

- ・料理の力を信じて一久慈東高校（総合学科）の生徒の「炊き出し」の体験談で、調理師免許取得ができる久慈東高校への進学した動機に触れている。食物系列の授業についても触れている。
- ・畳の上で闘う 一関第一高校競技歌留多部－「かるた甲子園」に連続出場する競技歌留多部の練習の紹介。
- ・「スマホマナー十カ条」 金ヶ崎高校－生徒たちが制定した「スマホマナー十カ条」の紹介。
- ・食えることが生きるエネルギー 宮古水産高校－同校が取り組んできた食育活動と防災活動の紹介。食物科による出前クッキング教室や、校区の小・中学校と連携して、実習船「りあす丸」「海翔」の厨房内で食事を作る実習船非常時対応訓練の紹介。
- ・「体の健康」と部活動一部活動を通して心身の健康が培えることの解説。

「かかわる」の項目は、次のようになっている。

- ・あの娘へー東日本大震災被災者の手記からー 大槌町在住の女性の手記。
- ・ドイツがもたらした雫石高校と山田高校の交流ー東日本大震災のドイツからの支援を契機に両校の交流が始まった。海の運動会（山田高校）と雪上運動会（雫石高校）に両校生徒が参加。
- ・小中高連携で魅力アップ 軽米高校－連携型中高一貫教育をしている軽米中学校と軽米高校の取組の紹介。また、町内の3小学校にも軽米高校の生徒が出かけ、文化祭のPR活動をした。
- ・震災の記憶を演劇で伝える大船渡高校演劇部ー東日本大震災と向き合った演劇の上演にチャレンジしている。
- ・アイデアあふれる販売実習で地域に貢献ー県内3校の商業系高校の販売実習の紹介。宮古商工高校（模擬株式会社「宮商デパート」）・水沢商業高校（「ござえちゃんハウス」）・盛岡商業高校（「盛商マート」）の販売内容や企画の紹介を行っている。
- ・いのち輝く百年創造塾 西和賀高校－「人生百年の将来設計を自分で創る」ことを目的とした百年創造塾の活動内容の紹介。高校生が地方創生を提案。
- ・津波被害から命を守ろう 桜ライン311ー陸前高田市の津波到達点を桜の木で繋ぐ事業の紹介。この事業には陸前高田市の学校だけでなく、周辺自治体の中学校や高校も参加している。
- ・沿岸地域との交流で「生きる力」を育む一戸高校ー沿岸被災地域、特に野田村や田野畑村との交流をしてきた一戸高校の活動の紹介。
- ・災害ボランティア活動から学ぶ防災 沼宮内高校ー全校ボランティア活動に取り組んだ沼宮内高校の活動紹介。
- ・宮古水産高校によるスノーバスターズ in 西和賀ー豪雪地域の西和賀町に生徒が出かけ、雪下ろしの活動を実施し、西和賀高校の生徒と交流を行う。夏には西和賀高校の生徒が、宮古市へ出かけ、実習船に乗ったり、ダイビングやイカ釣り漁をした。
- ・地方創生カシオペア講座 福岡高校の高大官民連携事業ーグローバル人材育成プログラムである「地方創生カシオペア講座」を高校、大学、自治体、民間企業の連携で実施している。
- ・伝統芸能の継承と発展を支える高校生たちー大償神楽の継承（大迫高校）、春日流落合鹿踊りの継承（花巻農業高校）、岩崎鬼剣舞の継承（北上翔南高校）の伝統芸能の取組の紹介。
- ・紫根染で地域に奉仕 平舘高校家庭クラブーシソ科の多年草「ムラサキ」を使った「紫根染」

の研究や敬老会に贈る紫根枕の制作などの紹介。

- ・想いをカタチに 盛岡第二高校の復興支援事業－2011年から開始した仮設住宅にクリスマスツリーを贈る取組や被災地支援の内容を紹介。防災スクールに指定された2015年以降、1年生は被災地学習に取り組んでいる。
- ・釜石高校の震災伝承活動－震災の疑似体験や復旧復興の取組で得た教訓を語り継ぐ伝承活動の紹介。

「そなえる」の項目は、以下のようになっている。

- ・一人一人の立場でできることがある－東日本大震災津波伝承館 いわて TSUNAMI メモリアルー 東日本大震災津波伝承館の展示内容の紹介。津波の紙芝居や消防団、建設業者などの「命を救う行動」の紹介、避難行動の調査結果の紹介などが挙げられている。
- ・ものづくりで防災意識向上 津波模型 宮古商工高校－機械科3年の「課題研究」で設計された津波模型による津波のシミュレーション（震災前の2005年から実施）の紹介。
- ・日本列島にはなぜ自然災害が多いのか 地震・津波・水害・土砂災害と地形
- ・自然災害のしくみと被害 東北地方太平洋沖地震では何が起きていたか－地震のしくみと被害、東北地方太平洋沖地震、津波のしくみと被害、津波（地震津波）の特性、火山噴火のしくみと被害、台風のしくみと被害、急な大雨・雷・竜巻、豪雪とその被害について、5頁にわたって詳しく解説している。
- ・語り継いでいく使命「総合的な探究」で碑文や証言を記録 山田高校－「総合的な探究の時間」で岩手日報連載の「碑の記憶」を教材として学習し、津波を体験した「語り部」にインタビューをしたり、織笠地区の石碑に記されている内容を分析したりするフィールドワークの紹介。
- ・命の路を啓く「くしの歯作戦」の道路啓開－国土交通省東北地方整備局が大震災直後に実行した「道路啓開」（緊急車両などの通行のために早急に最低限の瓦礫処理を行い、簡易な段差修正などにより救援ルートを確認すること）の解説。「くしの歯作戦」は、第1ステップとして内陸部を南北に繋ぐ東北自動車道・国道4号線の縦軸ラインの確保、第2ステップとして縦軸ラインから沿岸部への横軸ラインを繋ぐ、第3ステップとして横軸ラインが沿岸部に到達した部分から南北に繋がる道路の啓開という経過をとった。岩手県内の横軸ルートは9ルートであった（東北地方全体では16ルート）。震災4日後には15ルートが啓開されたのは、横軸ルートを16ルートに絞ることで効果的に人員・機材が投入できたことなどによる。
- ・被災地の情報を伝えた釜石漁業無線局－震災時に漁業無線を使ってSOSを発信し、救援を求めた釜石漁業無線局の取組の紹介。国際遭難周波数を用いて避難者名簿や救援要請を発信した。
- ・小中学生と連携して防災力をアップ 久慈東高校－久慈中学校と久慈東高校が合同で防災セミナーを実施したり、壁新聞づくりを行った活動の紹介。
- ・災害のときは「てんでんこ」－誰のことも責めないために－住田高校教諭の手記。母からの教え「自分のことは自分で守る」「てんでんこ」について言及している。
- ・特別支援学校における防災活動－県内4校の特別支援学校の防災活動の紹介。花巻清風支援学校は、小学部から高等部まで連携した総合防災訓練を行った。盛岡みたけ支援学校は、防災訓練を年々進化させている。釜石祥雲支援学校は、本校舎、高等部校舎、しゃくなげ分教室に分

かれて避難訓練を行った。盛岡峰南高等支援学校は、生徒会が企画運営に参加するなど、自主性を重んじた復興・防災教育を行った。

3.2 高等学校副読本の特徴

高等学校の副読本は、37項目から成っている。中学校用が45項目であるのに対して、項目数が減少している。

刊行が東日本大震災から9年ほど経過しているので、大震災のことだけでなく、岩手県教育委員会が進めてきた広い意味での復興教育が多面的に記述されている。防災・復興教育だけでなく、キャリア教育や郷土学習などについての各学校の実践が紹介されている。

「いきる」では、13校の取組（うち1校は障がい者スキー選手）が紹介されている。そのうち、狭義の防災教育と言えるものは2校である。「かかわる」では、19校が紹介されているが、狭義の防災教育と言えるものは5校である。「そなえる」では、8校（うち1校は教諭の手記）が紹介されているが、狭義の防災教育と言えるものは7校である。「そなえる」の中には、4校の特別支援学校の取組が含まれている。

3領域について、重複する学校を除くと、30校の高等学校と4校の特別支援学校が取り上げられている。全県の公立の学校数のうち、副読本に取り上げられた高等学校の割合は69%、特別支援学校の割合は27%となっている。

「いきる」では、県内のみならず海外を含めた学校間交流、小規模校サミット、特色のある高校の教育の紹介、校内のクラブ活動の紹介、「体の健康」と部活動など内容は多岐にわたっている。「かかわる」は、取り扱われた項目が3領域の中でもっとも多く、対象の高等学校数をもっとも多い。内容は、大震災を風化させない組としての劇の上演、被災地となった沿岸地域との交流、ボランティア活動、高大官民連携の取組、小中高連携の取組、伝統芸能の継承、震災伝承活動など多岐にわたっている。

「そなえる」では、中学校用と同様に自然災害の解説に多くのページが割かれているが、記述内容は中学生よりも高いレベルの内容となっている。この領域の特徴は、4校の特別支援学校の実践が取り上げられていることである。

高等学校の授業としての津波模型の制作（宮古商工高校機械科）、「総合的な探究の時間」での碑文や証言の記録収集といったフィールドワーク（山田高校）なども興味深い。

国土交通省東北地方整備局による「くしの歯作戦」の道路啓開、釜石漁業無線局による国際遭難周波数を用いた安否確認や救援要請などは、被災地の県民でも知られていないことであり、情報としても有効活用ができるものである。

中学校副読本の特徴でも記述したように、「いきる」「かかわる」「そなえる」は相互に関連性がある。指導に際しては、関連づけて実施することが望まれる。とりわけ、「総合的な探究の時間」での実施がもっとも適しているであろう。また、専門学科での授業と関連づけたり、クロスカリキュラムの視点での授業開発も期待できよう。

IV. 「いわての復興教育」プログラムの成果

岩手県教育委員会は、2013年2月に『「いわての復興教育」プログラム 改訂版』を刊行した。前報（藤岡，2019）では、その概要を紹介した。岩手県の復興教育の意義としては、「震災津波の体験から学んだことを生かす」と「どんな時でも、生き抜くための力を身に付ける」の2点を挙げている。復興教育の推進のポイントとして、目的では、「郷土を愛し、その復興・発展を支える人材の育成（復興・発展を支えるひとづくり）」が示されている。

これらを具現化したものが、副読本『いきる かかわる そなえる』であり、この間の復興教育の進展を鑑み、小学校用と中学校用の改訂版の刊行と併せて、2020年には高校用の副読本が完成した。

「岩手の復興教育」の成果としては、①復興教育の定着、②復興教育の広がり、③復興教育に取り組んだ学校の変容、④復興教育に取り組んだ教員の変容、⑤復興教育に取り組んだ子どもたちの変容、⑥復興教育による家庭・地域との連携の強化、⑦復興教育による関係機関・団体等との連携の強化—の7点を挙げている（岩手県教育委員会，2019）。

①では、学校教育に位置づいていることや年間計画が作成されていることが挙げられる。②では、教科指導・防災教育だけでなく、健康教育、道徳教育、地元学など多岐にわたる。③では、子どもの主体性重視、家庭・地域との連携を重視、教科横断的な視点からのカリキュラム・マネジメント、相互的な学びなどである。④では、子どもたちを多様な視点で見ようになった、教員の創意工夫を生かす機会が増えた、自校や他校・異校種間と協力する機会が増えたことなどが挙げられている。⑤では、命の大切さについて真剣に考えるようになった、自分自身で心の健康を維持できるようになった、友達や地域の方々と協力できるようになった、災害や防災への理解や意識が高まった、自主的にボランティア活動を行ったなどが指摘されている。⑥では、「まちあるき」等、地域のよさに気付く取組が増えた、家庭・地域の方々の参画による取組が増えたなどが指摘されている。⑦では、盛岡地方気象台、岩手河川国道事務所等の活用が増えた、岩手大学、岩手県立大学等との連携が増えた、自治体の関係部局と連携する機会が増えた、産業界と連携・協働する機会が増えたことが指摘されている。

⑦に関して少し触れておこう。岩手大学では、工学部に地域防災研究センターが設置されたが（2007年設置）、東日本大震災直後の2012年に、全学組織として再編された。また、教育学部の附属教育実践総合センターが、2020年に教育実践・学校安全学研究開発センターに改組されている。

ところで、教職大学院でも防災・復興教育の取組の授業や研究が行われ、研究成果が論文としてまとめられている。高橋・鈴木（2017）は、震災時は岩手県立大槌高校校長であった実務家教員の高橋が避難所運営に関わり、どのように学校経営を行ったかを回顧している。森本・土屋（2017）は、釜石市の中学校教員を経験した実務家教員森本が、中学校勤務時に行った津波の歴史と防災についての授業を概観している。森本・越野・蒔苗・鈴木・小松山（2019）は、岩手大学教職大学院が県教育委員会、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、気象庁盛岡気象台、岩手県と協力し、防災教育研修会を実施した取組を紹介している。このような実践や取組は、各県の教職大学院でも取り組むべき課題であろう。

筆者は、1986年4月から1999年7月まで岩手大学に勤務し、岩手の各地の学校を研究や学生指導などで訪問した。東日本大震災の岩手県の被災地の印象は心に強く残っており、防災教育の必要性も痛感している。当時の教え子たちが、教師として、指導主事として、校長として防災・復興教育に熱心に取り組んでいることを、嬉しく思う。東日本大震災を風化させないような持続的な取組とともに、被災地の復興を願っている。

引用・参考文献

- 藤岡秀樹 (2019) 防災・復興教育についての研究 (1) - 岩手県教育委員会の小学校副読本の内容の分析を中心に - 京都教育大学環境教育研究年報, 27, 65-73.
- 岩手県教育委員会 (2013) 「いわての復興教育」プログラム 改訂版 岩手県教育委員会事務局
- 岩手県教育委員会 (2014a) いきる かかわる そなえる 小学校低学年用 岩手県教育委員会
- 岩手県教育委員会 (2014b) いきる かかわる そなえる 小学校高学年用 岩手県教育委員会
- 岩手県教育委員会 (2019) 「いわての復興教育」プログラム 第3版 岩手県教育委員会事務局 学校調整課
- 岩手県教育委員会 (2020) いきる かかわる そなえる 中学校用 改訂版 岩手県教育委員会
- 岩手県教育委員会 (2020) いきる かかわる そなえる 高等学校用 岩手県教育委員会
- 森本晋也・土屋直人 (2017) 震災を生き抜いた子どもたちが学んだ津波の歴史と防災 地域に学ぶ教育実践の記録・釜石東中学校 (1) 岩手大学大学院教育学研究科年報, 1, 95-113.
- 森本晋也・越野修三・蒔苗 仁・鈴木智香・小松山浩樹 (2019) 防災教育教材の開発と教員研修の充実に向けて - 連携・協働による岩手県防災教育研修会の取組を通して - 岩手大学大学院教育学研究科研究年報, 3, 111-124.
- 高橋和夫・鈴木久米男 (2017) 震災時における学校経営に関する一考察 - 岩手県立大槌高校の事例を中心に - 岩手大学大学院教育学研究科研究年報, 1, 39-54.